

応用生物科学部

I	教育水準	教育 9-2
II	質の向上度	教育 9-5

I 教育水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 教育の実施体制

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準を上回る

[判断理由]

「基本的組織の編成」については、食品生命科学課程、生産環境科学課程及び獣医学課程の 3 課程を置き、社会のニーズに対応した教育プログラムを提示するために教育組織と教員組織を分離し、四つの大講座を設けて教育を担当している。また、教員数は 103 名、教員一名当たりの学生数は 8.88 名であるなどの優れた取組を行っていることから、期待される水準を上回ると判断される。

「教育内容、教育方法の改善に向けて取り組む体制」については、教育改善のために、自己点検評価委員会、教学委員会、企画運営委員会が設置され、学生による授業評価、教育職員個人評価及び卒業時アンケートが実施され教育改善が図られている。授業評価は教員へのフィードバックがなされているなどの優れた取組を行っていることから、期待される水準を上回ると判断される。

以上の点について、応用生物科学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、教育の実施体制は、応用生物科学部が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

2. 教育内容

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「教育課程の編成」については、応用生物科学に関する専門的能力を身につけた社会人

を育成するために、教養と専門科目を適切に編成している。また、専門高等学校からの推薦入学者を対象にした化学、生物、英語のリメディアル教育を学部独自で実施しているなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

「学生や社会からの要請への対応」については、常時、教養及び専門科目の見直しを行い、社会の要請に応じて教育内容を修正するために開講科目の廃止と新設を行ってきた。学生からの評価が高いインターンシップなどの優れた取組を行っていることから、期待される水準を上回ると判断される。

以上の点について、応用生物科学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、教育内容は、応用生物科学部が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

3. 教育方法

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準を上回る

[判断理由]

「授業形態の組合せと学習指導法の工夫」については、講義、演習、実験、実習がバランス良く組み合わされている。フィールド型授業ならびに情報機器を利用した授業も取り入れられ、指導法に工夫がみられる。ティーチング・アシスタント（TA）の積極的活用がみられ、受講生の評価も高い。他学部との共同による教育プログラム（平成 16 年度文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム）を開講し、地域社会との連携で、後継者を育成できる人材養成の特色ある教育を実施しているなどの優れた取組を行っていることから、期待される水準を上回ると判断される。

「主体的な学習を促す取組」については、履修科目の上限設定、グレード・ポイント・アベレージ（GPA）制の導入とその学生の評価への活用、勉学意欲の向上の環境を整えた。自学自習のためのコミュニケーションルームやグループ学習室を設置し、図書館ツアーの実施、学生の表彰制度の設置など、主体的な学習を促す環境への工夫が見られるなどの優れた取組を行っていることから、期待される水準を上回ると判断される。

以上の点について、応用生物科学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、

教育方法は、応用生物科学部が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

4. 学業の成果

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準を上回る

[判断理由]

「学生が身に付けた学力や資質・能力」については、学位取得率は獣医学課程は 88.0%、獣医学課程を除く課程は 81.3%である。学習達成目標の達成状況（年度ごとの進級率）は良好である。高等学校 1 種免許状、獣医師免許状の各種資格取得者も多数おり、獣医師免許取得率は 91.3%である。学内 TOEIC-IP の受験者数は 214 名と多く、国際化への対応をしている。また、大学で身に付けた能力について、卒業時にアンケートをしており、上記の学力や資質・能力についてかなり詳細な分析がなされているなどの優れた成果があることから、期待される水準を上回ると判断される。

「学業の成果に関する学生の評価」については、平成 18 年度に実施した卒業時アンケート結果では、教養科目に対する学生の勉学意欲は低いが、専門科目に対しては、「専門科目は総じて良く勉強したか」の設問に対し、学部全体で 58.0%が肯定的回答をしている。そのほか「各講義や実習の内容は理解できた」との設問に対して、講義では学部全体で 62.6%、実習は 73.0%が肯定的回答をしており、総じて 60%以上の学生は学業の成果に関して肯定的回答しているなどの優れた成果があることから、期待される水準を上回ると判断される。

以上の点について、応用生物科学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、学業の成果は、応用生物科学部が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

5. 進路・就職の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「卒業（修了）後の進路の状況」については、卒業率は 88%を示し、相応の状態である。大学院への進学率は 46%を示し、高度な技術を身に付けたい学生が多い。研究・技術職は 77.5%で、卒業生の進路にも学部の専門性が活かされているなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

「関係者からの評価」については、提出された現況調査表の内容では、関係者としての雇用者側の卒業生に対する評価が無い。しかし、学生を対象とした卒業時アンケートから、71.3%が希望職業に就けたと評価し、また「進路先は学んだ専門性と関連性が高い」と回答した学生は 60.3%を示している。一方、専門分野の関連性の低い分野への進路率は回答保留を除いて 33%（約 1/3）を示しているなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、応用生物科学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、進路・就職の状況は、応用生物科学部が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

II 質の向上度

1. 質の向上度

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

相応に改善、向上している

[判断理由]

「相応に改善、向上している」と判断された事例が4件であった。

上記について、平成20年度及び平成21年度に係る現況を分析した結果、平成16～19年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第1期中期目標期間終了時における判定として確定する。